

「お願いします！お願いします！」

【はじめに】

認知症高齢者が増加する中、「その人らしさ」「自分らしく生活する」ということは、多くの場面で認知症ケアの目標とされています。そして今は全員が同じケアではなく、個別性のある認知症ケアの提供と共に、その質を考える時代となりました。1992年トム・キットウッドが提唱した、その人らしさを尊重するパーソン・センタード・ケアは有名です。今回私たちは認知症を持つ方の一つの行動より、その方の生活全般を見直し、その人らしさを引き出せる結果が得られた事例を報告します。

【対象】

SS様 88歳 要介護2 認知症自立度 IIB

既往歴：高血圧 認知症 左大腿部頸部骨折

HDS-R：測定不能

【目的】

集団生活の中でS様の生きがいを見つけていただく

【方法】

- (1) 記録ノートを作成し本人の行動を把握し職員間で共有を行う。
- (2) 本人にあった作業を実施して頂く。(リネンたたみ・タオルたたみ)
- (3) クラブ活動の参加を促す。
- (4) 計算ドリル・漢字ドリル実施。
- (5) 内服薬調整。平成26年2月19日～クエチアピン2錠(朝・夕)現在も継続中。
- (6) 作業やドリルが終わった際は長所・感謝の言葉を伝える。

【結果】

- (1) ノート活用し職員間で情報共有が出来た。
- (2) センサーも外れてトイレも自立しADLも向上。日中は好きなクラブ活動へ参加した。
- (3) 「お願いします」という欲求の表出が減少した。
- (4) HDS-Rが測定不能から18点へ向上した。
- (5) 内服薬を継続して服用しており落ち着いた生活をされている。
- (6) 日中充実した生活を送れる様になった事で夜間の良眠も得られるようになった。

【考察】

本人の出来ないことや、欠点に焦点をあてるのではなく、できたこと、良い点、長所に焦点をあて、そこを伸ばすように援助したことが良い結果に繋がったのだと考えます。

清拭巻きのお礼、ドリルでの高得点、シーツたたみなど毎回私たちは助かります、有難うございますと声を掛けました。

職員本位の視点ではなく、本人のニーズにあったことを選択できたことがよかったと思います。今回は計算ドリル、漢字、また昔小学校の教師をしていたことがあり、ドリルの採点等の時は、先生と呼んだ事も良い結果に繋がったと考えます。

「お願いします」という表現を問題行動ととらえるのではなく、コミュニケーションの手段であるという考え方に変わりました。

「お願いします」毎回同じ言葉で職員を呼んでいますが、時にはトイレ、ティッシュを取って欲しい、ベッドに連れて行って欲しい、お茶を飲みたいなど、全ての行動に何か意味があるという考えをもつようにしました。

一人の利用者への対応を変えることで、フロア全体の雰囲気明るく活気が出ました。共に作業をする、皆様を労い敬うことで、共同生活、仲間という認識が生まれたとも思えます。

S様だけではなくフロアの利用者の方々が何かを見つけ、実施するという雰囲気に変わりました。

【おわりに】

認知症高齢者としっかり向き合い、その方を知る努力を怠らず、その人らしさを尊重できる介護職でありたいと思います。基本的な身体介護に加え、認知症の方達の有する能力を伸ばせるような手助けをこれからも考え、行動していきたいと思います。